

第5節 1区352号竪穴建物跡から出土したクルル鉤について

1. 古代の鍵

洋の東西を問わず、鍵は「富の象徴」としてとらえられる。鍵をかけるという行為は、ものそのものが私有であると共有であるとを問わず、ものに対する所有の意志を強く主張することに他ならない。

人類史上、確実な最古の鍵は、古代エジプトで用された「エジプト錠」で、紀元前3世紀にまで遡る。門と錠本体とを数本のピンで固定し、外から解錠するときは、扉の穴から鍵を差し込んで、ピンを押し上げて門を動かす仕組みである。

わが国の古代において使用された鍵は、大きくみて2種類ある。

一つはいわゆる「海老錠」と呼ばれるもので、今日一般的に「南京錠」と呼ばれて広く使用されている錠とほぼ同じ原理のカギである。錠前（Lock）と鍵（Key）のセットで機能し、すでに紀元前1世紀頃からローマから西アジア地方、中国大陸でも使用されている。わが国では正倉院に奈良時代の実物が伝わっているのを初めとして、飛鳥京・平城京・長岡京などの古代都城の遺跡や、大宰府・多賀城・武蔵国府など地方官衙跡から多くの類例が出土しており、遅くとも7世紀後半頃から使用されていたことが判明している。この種類の鍵は、中国・朝鮮半島から伝えられ、国内に広まっていったのであろう。わが国における古代の海老錠には、正倉院に伝存しているものを含めて、非常に精巧に作られているものが少なくなく、精密な装飾や鍍金が施されていたりする例が有り、材質も金銅製・銅製・鉄製など様々である。それらは正倉院の伝世品はもちろんのこと、出土品も都城や官衙・寺院などの遺跡からみつかったものがほとんどで、言わば高級品と言えるものが多い。これまでわが国で伝存・出土しているものには、比較的小型のものが多いので、それらは建物の扉に付けられた鍵ではなく、厨子や櫃などの鍵とし

て使われたものとみられる。

また、今ひとつは、一般に「クルル（リ）鉤」と言われ、かぎの手状に直角に大きく折り曲げた細長い鉄棒に木質の柄を付けた鍵である。折れ曲げられた鉄棒の先端は、さらに小さく折り曲げられフック状になっているものが多く、扉に開けられた小さな鉤孔から鉤を差し込んで、先端のフックを内側に取付けられた棧や門に引っかけて、上下ないし左右に動かすことによって解錠する。金属製の錠と錠がセットになって使用される海老錠のような錠前とは全く異なる原理・構造である。これらは海老錠に比べて格段にサイズも大きく、また現代まで使用されている例からみても建物の扉の鉤と限定できる。

古代の鍵について、専門的に考古学的な研究を進めておられる合田芳正氏によれば、奈良・平安時代の史料にあらわれる各種の鍵に関する用語のうち、「鑑」「鑰」は倉の内側にある棧や門を外側から操作して開けるカギ、「鉤匙」「匙」は錠前に差し込む鍵（Key）、「鎖子」は厨子・唐櫃などに取付けた錠前（Lock）をそれぞれ指すことが明らかにされている。史料上あらわれる「鑑」「鑰」の数が「勾」「柄」であることからみれば、それらが折れ曲がった形状を呈し、柄が付いている様子が容易に察せられ、それら「鑑」「鑰」が、具体的にはクルル鉤を指していることが判明する。また、一方、「鎖子」の数がセットを意味する「～具」であるところからみれば、それらが錠と錠前との組み合わせであることは明白である。

クルル鉤は、「くるくる」と回転させて使われることからそのように言われるようになったとか、あるいはクラ＝倉庫のカギ、「クラのカギ」の語が訛って「クルル鉤」と呼ばれるようになったとか、名称の由来についてはいろいろと言われているが、正確なところは定かではない。鉤を回転させて使うという点については、扉の内側から見ると鍵穴の周囲に、クルル鉤を回すことで付けられた円形の傷跡が残っていることが多いことによっても裏付けられる。現在でも古い土蔵や民家、神社の社殿や寺院の堂宇の

扉の鉤として使用されている。

クルル鉤の起源は今のところ定かではないが、構造が非常に単純で、言わば誰にでも考え付くような仕組みであり、さまざまな時期・場所でそれぞれ別個に使用されていても決しておかしくはない。ただ、現在までのところ、わが国以外の類例はない。

奈良時代から平安時代にかけてのクルル鉤は、本遺跡出土事例を含めて、全国各地の遺跡から45例が出土している(表2)。現在までの出土事例は、概ね関東地方に偏っており、甲信地域まで含めると45例の内の40例が関東甲信地域からの出土である。なお、関東甲信地域からの出土事例は、それらの9割9分が竪穴建物跡から出土している。近畿地方からの出土事例が5例あるが、この時代、西日本地域ではすでに竪穴建物は使用されないの、いずれも井戸跡や溝跡からの出土である。現在までのところ、東北・北陸・東海・中国・四国・九州地方からの出土例は報じられていない。

このような現在までの出土事例の分布状況が、必ずしも古代社会におけるクルル鉤の使用の多寡を示しているとは到底考えられず、掘方の深い竪穴建物跡の多用によって、東日本各地の方が遺物が比較的残存しやすい環境にあるとか、鉄という素材故の再利用の可能性など、全国的にみて、残存数が少ないの理由は想定できる。

近畿地方出土の5例には、いずれも柄部に装着された木製の把手まで残存しており、とくに、京都府向日市長岡京跡・奈良県奈良市平城京跡・大阪府藤井寺市はさみ山遺跡・兵庫県豊岡市但馬国分寺跡などから出土したクルル鉤は、木製の柄部から鉤爪部の先端に至るまで完存している。水分が多く、土中での木製品の残存に適した井戸跡や溝跡からの出土であるが故のことであり、ほぼ竪穴建物跡からの出土である関東甲信地域の類例では、柄部木製把手の完存は望みにくい状況であろう。先述したように、これらクルル鉤が、家具や調度品ではなく建物の扉の鉤と限定できることからすれば、クルル鉤の出土は、周辺に掘立柱建物跡、とくに倉庫の存在を想定

させる資料ということになる。

なお、本クルル鉤出土直後に、合田芳正氏に実見していただいた上で、種々の貴重な御教示や、類例の紹介など情報の提供を頂いた。

2. 本遺跡から出土したクルル鉤

クルル鉤は、竪穴建物跡の床面から出土しており、共伴した土器の年代観から、8世紀後半頃のものと思われる。解錠部の長さ22cm・軸部の長さ7.6cm、柄部の端は欠損しており残存長4cm。軸部の断面はほぼ方形を呈し、解錠部先端鉤爪部のフックの部分は、小さくほぼ直角に曲がる。

各地から出土した類例の鉤爪部には、直角ないし鈍角に小さく折り曲げられているものと、鉤爪部が直角に曲げられた上でさらに直角に折り込まれるように加工され「コ」の字状に造ったものの2形態があるが、本遺跡出土事例は前者のタイプにあたる。

合田芳正氏によれば、鉤爪部が小さく折り曲げられているタイプのものの軸部の断面は、方形・長方形・円形・多面形とバラエティに富むが、フック状、いわゆる鉤の手状に湾曲されるタイプの軸部の断面は一樣に長方形を呈するという。本遺跡出土事例は、鉤爪部が小さく曲がるタイプのものであり、軸部の断面の形状も、それらのタイプの鉤の特徴とよく合致している。

鉤の大きさとしては、解錠部の長さ51cm以上の高槻城下層のような例から、平城京右京二条三坊十坪出土あるいは神奈川県伊勢原市東大竹市場遺跡・同天王原Ⅲ遺跡出土の資料のように解錠部が40cmを越える例がある反面、兵庫県豊岡市但馬国分寺跡・大阪府藤井寺市はさみ山遺跡・千葉県八千代市白幡前遺跡・栃木県宇都宮市下谷田遺跡などの出土資料のように20cm前後とそれらの半分程度のものもある。本遺跡出土のものは、解錠部の長さが22cmであるから、全国の類例から見れば小型の部類に入る。施錠対象の大小により、クルル鉤そのものの大小長短がある程度関わっていたとは予想されるが、クルル鉤の大きさは扉に空けられた鉤孔と落とし桟との位置

関係によるところが最も大きい。

群馬県内では、東吾妻町小泉天神遺跡、渋川市三原田三反田遺跡での出土例に次いで3例目の出土例であった。その後、前橋市元総社蒼海遺跡でも1点クルル鉤が出土し、県内での出土例は4例になった。

本遺跡出土事例は、出土した際に解錠部2ヶ所と柄部1ヶ所が折損し、本来は木質の内側に入る柄部の先端も欠失しているが軸部と柄部の間の鉄輪は残っている。東吾妻町小泉遺跡出土のクルル鉤は鉤爪部が欠失しており、渋川市三原田三反田遺跡及び前橋市蒼海遺跡出土のクルル鉤は鉤爪部と柄部の先端が共に欠失している。本遺跡出土事例は、解錠部と軸部全体と柄部のあらかたが残存しており、県内出土4例のクルル鉤のうちで最も状態が良好である。

本遺跡では、クルル鉤は竪穴住居跡から出土したわけであるが、出土した竪穴住居そのものの鉤であるとは考えにくい。クルル鉤という名称が「クラのカギ」の語の転訛と考えられるくらいであるから、当然のことながら生産物・財物等の収納場所の鉤として使用されたものであろう。たまたま、集落の中のどこかの倉の鉤が、この竪穴住居の中に捨てられたとも考えられるし、また、この竪穴住居に、そうした倉の鉤を預かり、管理する人物が居住していた可能性も考えられる。

楽前遺跡では、倉庫とみられる総柱の掘立柱建物跡が3棟(63～65号)検出されており、この場所では何らかの生産物や財産が収納・保管されていた様子が伺える。竪穴住居から出土したクルル鉤は1点のみであったが、それら倉庫群のうちのいずれかの鉤であったと考えられる。

本遺跡で見つかった掘立柱建物跡群は、決して整然として配置されているわけではなく、それぞれの大きさもまばらであり、建物の規則性・企画性は伺えないので、この場所が役所や有力者の居宅などのような公的な施設であるとは考えにくい。しかしな

がら古代社会においては、借倉など集落の中にある倉が公的機関の使用のために借り上げの対象になることも存在しているため、倉庫の用途を特定することは難しい。後述するように、本遺跡及び周辺隣接遺跡からは郡名が記載された土器や円面硯、漆紙文書など、官衙との関連を強く伺わせるような遺物がまとまって出土しており、そうした状況も勘案しながら、本遺跡出土からクルル鉤が出土したことの歴史的意義を考えるべきであろう。

なお、鉤が機能するために必要な金具として、扉の内側に装着される門状の金具や、鉤穴を保護・補強するための鉤座金具なども、鉤とセットで出土している事例が多く、鉤を考える上で不可欠な器具であるが、本遺跡からは出土していない。

なお、本クルル鉤出土直後に、古代の鍵の研究者である合田芳正氏に実見していただいた上で、種々の貴重な御教示や、類例の紹介など情報の提供を頂いた。本報告の記載も合田氏の教示によるところがきわめて大きいことを明記しておく。

(参考文献)

- ・合田芳正「いわゆる鑑(クルリ鍵)について」(『青山史学』13、青山学院大学文学部史学科研究室、1992)
- ・後藤喜八郎「古代集落出土の『カギ』状大型『L』字型鉄製品について—古代集落研究によせて—」(『古代史研究』12、立教大学古代史研究会、1993)
- ・合田芳正『古代の鍵』考古学ライブラリー66、ニューサイエンス社、1998
- ・合田芳正「武蔵国府・国分寺跡出土の施錠具とその関連遺物」(『坂詰秀一先生古稀記念論文集・考古学の諸相』Ⅱ、匠出版、2005)
- ・松田富美子「門金具の出土事例—千葉県内の集成—」(『多知波奈の考古学—上野恵司先生追悼論集—』、橘考古学会、2008)

表6 出土した主な古代のクルル鉤 * 合田芳正氏提供の集成表を元に加筆

	出 土 遺 跡	出 土 遺 構	鉤 の 状 態	鉤 の 大 き さ (c m)			出土遺構 時期	備 考
				解錠部	軸 部	柄 部		
1	群馬県東吾妻町 小泉天神	2号竪穴	鉤爪部欠	(21.2)	14		8 C 中	軸部と柄部の関不明瞭
2	群馬県渋川市 三原田三反田	13号竪穴	鉤爪部・柄部端欠	(10.0)	(7)		8 C 後	〃
3	群馬県前橋市 元総社蒼海	6区H-1 竪穴	鉤爪部・柄部端欠	(22)	(5.4)		古代	〃
4	群馬県太田市 楽前	352号竪穴	柄部端欠	22	4.5	(4)	8 C 前	柄部木質ごく一部残存、関金具
5	栃木県宇都宮市 西下谷田	SI315竪穴	完形	20.2	7.6	6.6	8 C 前	柄部木質残存せず
6	栃木県小山市 金山	019A竪穴	鉤爪部欠	41	10.3	(5.6)	9 C 後	柄部木質一部残存
7	茨城県水戸市 堀	2号竪穴	報告書未掲載	未掲載	未掲載	未掲載	不明	報告書未掲載
8	茨城県つくば市 島名八幡前	84号竪穴	完形	36.1	18.5		8 C	軸部と柄部の関不明瞭
9	茨城県鹿嶋市 厨台No.26	6号竪穴	完形	28.8	7	7.4	8 C	断面先端六角形、解錠部八角形、軸部四角形の面取
10	埼玉県本庄市 今井D	4号竪穴	鉤爪部・柄部端欠	24	6.6	—	8～9 C	
11	埼玉県深谷市 北坂	13号竪穴	完形	37	8	7	8 C 前	柄頭・柄尻青銅金具径3cm、柄尻に鎖3連
12	埼玉県和光市 花ノ木	7号竪穴	鉤爪部欠	(28)	6.5	(10.3)	9 C 後	柄部木質残、柄尻端鎖あり
13	東京都北区 田端不動坂	2号土坑	鉤爪部-解錠部先端部欠	(21.9)	8	12.6	9 C 後	柄部木質残
14	東京都板橋区 栗原	5号竪穴	鉤爪部欠	(26.7)	6.5	11	平安	
15	東京都府中市 武蔵国府関連(日鋼地区)	15号竪穴	鉤爪部・軸部欠	34.8	—	13.6	9C末-10C初	柄部木質残、柄尻端鎖
16	〃	80号竪穴	鉤爪部・軸部欠	(23.8)	—	—	9 C 初	
17	〃	〃	鉤爪部・解錠部一部-軸部・柄部欠	(12)	—	—	9 C 初	
18	〃 (駅南地区)	M-60SI155竪穴	完形	26.5	7.5	10	8 C	柄部木質一部残
19	東京都日野市 落川	72号竪穴	鉤爪部・柄部欠	(34)	9.3	(3)	10 C 後	
20	神奈川県伊勢原市 東大竹市場	8号竪穴	鉤爪部欠	(41.2)	6	10	9 C 後	
21	神奈川県伊勢原市 天王原Ⅲ	11号竪穴	完形	40	5.5	12.2	8 C 後	門金具出土
22	〃	74号竪穴	軸部・柄部欠	30	—	—	9 C 前	〃
23	神奈川県伊勢原市 田名塩田原	8号竪穴	鉤爪部・柄部欠	(24.2)	4	(2)	9 C 前	
24	千葉県八千代市 白幡前	236号竪穴	先端・軸部・柄部	17.4	17		9 C 前	軸部と柄部の関不明瞭
25	千葉県八千代市 向境	遺構外	鉤爪部・柄部欠	(20)	(2.4)		不明	門金具出土
26	千葉県八千代市 上谷	A211竪穴	鉤爪部欠	(22)	3.1	(5.4)	9 C 後	門金具出土、環状金具
27	千葉県成田市 野毛平植出2	3号竪穴	柄部端欠	(22.4)	8	(6.8)	9 C 中	門金具出土
28	〃	〃	解錠部一部	(11.8)	—	—	9 C 中	柄部木質残
29	千葉県我孫子市 野守	4号竪穴	ほぼ完形	26.5	18		9 C 後	軸部と柄部の関不明瞭
30	千葉県船橋市 印内台	008台地	鉤爪部・柄部欠	(17)	(10)		不明	門金具出土軸部と柄部の関不明瞭
31	千葉県千葉市 観音塚	製鉄P27	鉤爪部・柄部欠	(10.3)	(7.8)		8 C	門金具出土、
32	〃	製鉄P27	鉤爪部・柄部欠	(8.4)	(6)		8 C	〃
33	千葉県四街道市 小屋ノ内	SI098竪穴	鉤爪部・柄部欠	(34.1)	8		9 C	門金具出土
34	千葉県東金市 久我台	188号竪穴	解錠部一部	(11.6)	(13.8)	—	9 C 前	門金具出土
35	千葉県東金市 作畑	162号竪穴	柄部欠	33	9	—	8 C	門金具出土
36	千葉県東金市 大綱山田台	H-128A竪	柄部一部欠	26	4	(3.6)	9 C 前	関部突起、柄部木質残
37	山梨県山梨市 日下部	1号竪穴	鉤爪部欠	(33)	5	16	平安	柄尻環状金具
38	長野県千曲市 更埴条里屋代	包含層	完形	37.5	10	6.5	不明	関部鉄輪
39	長野県御代田町 根岸	28号竪穴	鉤爪部・柄部一部欠	24	8	—	9 C 末	
40	長野県箕輪町 中道	30号竪穴	完形	20.8	6	8.2	8 C	柄部木質残
41	京都府向日市 長岡京(左京13次)	溝SD1301	〃	30	6	12	8 C 末	柄部木質完存径3.4cm
42	奈良県奈良市 平城京	井戸SE504	〃	44.5	9.2	13.4	8 C 後	柄部木質完存径3.2cm、関及び柄尻に環状金具
43	大阪府高槻市 高槻城下層	3号井戸	鉤爪部欠	51	10	11.5	8C後～9C	柄部木質完存径4cm
44	大阪府藤井寺市 はさみ山	井戸	完形	21.7	4.7	9.3	8 C	柄部木質残
45	兵庫県豊岡市 但馬国分寺	井戸SE04	完形	19.2	3.6	8	8 C 後	柄部木質完存径3cm。柄尻に環状金具

*文献1. 吾妻町(当時)教育委員会『町内遺跡Ⅲ 小泉天神遺跡』2004、2. 赤城村(当時)教育委員会『三原田三反田遺跡』2001、3. 前橋市教育委員会『元総社蒼海遺跡群』2010、4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『楽前遺跡』(2)2010、5. 栃木県教育委員会『西下谷田遺跡』2003、6. 栃木県教育委員会『金山遺跡』Ⅱ1994、7. 水戸市教育委員会『堀遺跡』1994、8. (財)茨城県教育財団『島名八幡前遺跡』2003、9. (財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団『鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告』ⅩⅡ1996、10. (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』1985、11. (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団『清水谷・安光寺・北坂』1981、12. (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団『花ノ木・向原・柿の木坂・水久保・丸山台』1994、13. 北区教育委員会『田端不動坂遺跡』2003、14. 立教大学文学部『栗原』1975、15～17. 日本製鋼所遺跡調査会『武蔵国府関連遺跡調査報告-日鋼地区-』1995、18. 府中市教育委員会『武蔵国府関連遺跡調査報告34-国府地域の調査26-』2005、19. 落川区画整理地区(中村マシヨン)遺跡調査団『落川遺跡』2001、20. 諏訪問伸『東大竹・市場(V)遺跡』(伊勢原市教育委員会『文化財ノート』(2))1992、21～22. 天王原遺跡(Ⅲ)発掘調査団『伊勢原市天王原遺跡発掘調査報告書-第三地点-』1996、23. 田名塩田原遺跡調査団『田名塩田原遺跡群』1993、24. (財)千葉県文化財センター『八千代市白幡前遺跡』1991、25. 八千代市遺跡調査会『向境遺跡』2004、26. 八千代市教育委員会『上谷遺跡』2004、27～28. (財)印旛郡市文化財センター『ニュー東京空港ゴルフ場造成地域内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』Ⅲ1990、29. 我孫子市教育委員会『平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』2001、30. 船橋市教育委員会『印内台遺跡群』(32)2003、31～32. 千葉県文化財センター『千葉市観音塚遺跡』2004、33. (財)千葉県教育文化財団埋蔵文化財センター『四街道市小屋ノ内遺跡』(2)2006、34. (財)千葉県文化財センター『東金市久我台遺跡』1988、35. 作畑遺跡調査会『千葉県東金市作畑遺跡発掘調査報告書』1986、36. (財)山武郡市文化財センター『大綱山田台遺跡群』Ⅱ1995、37. 山梨市教育委員会『日下部一日下部遺跡発掘調査報告書』1987、38. (財)長野県埋蔵文化財センター『更埴条里遺跡・屋代遺跡群、古代2・中世・近世編』2000、39. 御代田町教育委員会『鋳物師屋遺跡群根岸遺跡』1989、40. 長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-上伊那箕輪町・昭和48年度』1974、41. 向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』41978、42. 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財発掘調査概報平成8年度』1997、43. 高槻市教育委員会『高槻市文化財年報 平成2年度』・『同 平成4年度』1991・1993、44. 大阪府教育委員会『外環状線遺跡発掘調査概要』Ⅰ1974、45. 日高町(当時)教育委員会『但馬国府と但馬国分寺 発掘調査からその謎に迫る』2002